



ひつじがはこんだ
夢のうた



だいず

ひとりあるき

這うようにして 闇のなかを彷徨う。
彷徨う足取りでも どこかには辿りつくはず。
ここではない どこかなら どこでもいい。
泣くようにして 黒のなかを彷徨う。

彷徨って 彷徨って
明けない迷路の中へ。
夜明けが昏い 森のなかへ。
どこへ行くの どこへ行くの
わたしも知らないどこかへ。
夕立が明るい 草原の真ん中へ。

流れ星に願いはかけない。
砕いて 散らして 足元を照らして。
いまはいつか叶う願いごとより
この足元を照らすことを優先させなくては。

歩きつづけ 歩きつづけ
いつか終わるはじまりのなかへ。
真っ白な闇が弾ける 衛星の裏側へ。
うたいつづけ うたいつづけ
いつか始まるおわりのなかへ。
真っ暗な光が広がる この空の彼方へ。

病葉を踏む足音だけが
いまは生きているということ。
枯れ木が与える痛みだけが
いまは自分を許しているということ。

動きつづけ 動きつづけ
だれも知らない場所をさがすの。
ひよこが卵に孵る場所まで。
泣きつづけ 泣きつづけ
わたしがいる場所をさがすの。
ここではない どこか遠くをさがすの。

風のまえの塵におなじ

手のひらのうえのもの
なにひとつ守れなくて
風のまえの塵におなじ。

こころのなかのあたたかなもの
なにひとつ大切にはできなくて
ただただ風のまえの塵におなじ。

けれど
それは
手のひらのうえにあったものが
こころのなかにあったものが
消されたわけじゃない。

どんな風にも
どんな雨にも
消せないものがある。
どんな風からも
どんな雨からも
ただわたしがいるだけで 守れるものがある。

強くなくても
弱いままでも
守れるものがある。

ただ わたしが生きているだけで 守れるものがある。
ひとは
それを
『いのち』と呼ぶ。

しあわせのあぶく

きみが笑うたびに
こころの震えがおおきくなって
きみが泣くたびに
こころの震えがおおきくなって
毎日
きみを受け入れる
こころの体積が増えていく。

だから 笑って。
だから 泣いて。
ありのままのきみでいて。

ぼくのこころに
いっぱいになったきみは
光の水のなかで
きらきら笑う。
泡が
口元から
たくさん零れて
水面に向かって
きらきら昇ってゆく。

きみがいる。
きみがいる。

しあわせ
しあわせ
だなあ。

体の充電

どなたか わたしの体を 充電してください。

あのひとがいなくなってから
だれも 抱きしめてくれないから

途切れがち
かすれがち
途絶えがち

そんなわたしの息が
いつか息絶えやしないかと
それはほんとうにほんとうにもう
気が気ではなくて
それを確認するためだけに
息をしているようなものなのです。

どなたか わたしの体に インクを補充してください。

目の前にいるひとに
嫌な想いをさせてはしないかと
それはほんとうにほんとうにもう
気が気ではなくて
あのひとを失ったように
もうだれも失わなくてすむように

どなたか わたしの体に ころを補充してください。

未来のさきに見えるもの

ぼくたちはすこしずつ
夢見がちな目を醒まして。
ぼくたちはひとつずつ
空想に飛んでいきそうな風船を割って。

地に足をつけることが
おとなになることですか？
分別をわきまえ
礼儀ただしく
笑顔絶やさず
それがおとなになることですか？

ゆっくりときょうがおわっていきます。
すこしだけでいいからじかんをとめてください。
おとなになりきれずあせってもがくだけのわたしのじかんをとめてください。

子供のうちにやっておきたいことがあるんだ。
地に足をつけずにふわりふわりと生きて
思い切りわがままを言い
他人を困らせ
泣きじゃくり
いままで 仮面の陰に隠しておいたことを
全部やってから おとなになりたいんだ。

ささらさらり。
ゆれるカーテン じかんがないよとつげる。
はばたけ はばたけ よぶこえがきこえる。

ただ
ひとつだけおしえて。
羽ばたいた先に どんないいことがあるの？
なにが待っていて だれを愛して どこに行けるの？
おとなになるということは そんなにいいことなのですか？

郵便受け

赤いポストを覗く。
きみからの手紙が届いた。
これで何通目になるんだろう。
うれしくて ギゅっと抱きしめる。

わたしの部屋の天井は
いっぱい貼り付けた
きみの手紙でいっぱいだよ。
どんなにひとりの夜でも
きみの言葉に包まれて眠ることができるよ。

赤いポストを覗く。
きみからの手紙はない。
たぶんこれからずっと生きていても
きみからの手紙が届くことはもうないのだろう。

それでも
わたしの部屋の天井には
あのやさしい筆跡で
まっすぐところに届くきみの言葉が
渦巻いているよ。

泣いたりはしないよ。
たぶん
きみも
わたしの手紙を
天井いっぱい貼り付けて
微笑もうと しているのだろうから。

嘆いたりはしないよ。
わたしは
きみからの手紙に
ずっとずっと
包まれて
きみがいなくなってからも

きみの言葉に包まれているから。

足跡

まっすぐに 空を見上げられなくなった。
月が出ていないことを 影がないことでしか知ることができない。
まっすぐに 前を向けなくなった。
歩きつづけていることを 草の色の変化でしか知ることができない。

俯くことを覚えた あの日から。
俯きはじめた あの日から。

影のない足元に
ぼんやりと浮かび上がるのは
泥に塗れた 薄汚いスニーカー。
洗ってやることなど ずっと忘れていた。
守られていたのに それにも気がつかなかった。

きっと 神様が 罰を与えたのだろう。
スニーカーが汚れたのを あなたのせいにしたことに。

この靴が
このちいさな靴が
とてもおおきかったことに
どうして気がつかなかったのだろう。

俯いた瞳から ぼたりぼたり 涙が零れる。
いまさらのように スニーカーのう上に落ちる。
せめてもの慰めのように 白い丸を描いていく。
わたしを肯定するように。

この靴は きっと あなたがくれた愛。
ボロボロになっても 履き替えなくておくよ。
足跡をたどって もういちどあなたが
空を 前を 見ることをおしえてくれるように。

雨

夕立。
白い豪雨に変わる。

だれかいらないの？
どこにもいないの？
どうしてわたしの呼ぶ声は
いつもノイズに紛れてしまうの？

叫んでも
わめいても
だれにも届かない。

夕立。
黒い豪雨に変わる。

絶望が
こころを
ひたひたと浸してゆく。

六畳の部屋。
ここだけがわたしの世界。
ドアには外から鍵がかけられていて
わたしの世界は わたしを置き去りのままぐるぐる回る。

どうしてわたしの呼び声は
いつもだれにも届かないの？

雨音。
わたしの心音さえ
かき消すように 嘲笑う。

ねえ だれか わたし 生きてるって 言って？

圏外のひと

いっぱい充電した携帯を
充電器から引き離す。
番号を呼び出して
いつもの声を聞く。

『どうしたの？ なにかあったの？』
なにかなければ あなたに電話してはいけないのですか。

『どうしたの？ だいじょうぶだよね？』
だいじょうぶなときは あなたに電話してはいけないのですか。

声が震えないように
陽気さを取り繕いながら
いつものように
他愛のない話
(いまなにしてる？ 書類を書いていたんだ。)
最後と決めた
他愛のない話をする。

隔たりが いつのまにかできてしまっていたね。
なにもなくても 笑いあえたあのころは
きっと 両想いだったけれど
片想いだった恋が
慰めに見せた 幻。

いつものような
いつもではない
いつものような
さいごのはなし。

この携帯の
充電が切れたら
あなたは永遠に
圏外のひと。

あなたの心の

糸が切れたら
わたしも永遠に
圏外のひと。

蛍

きれいな水と
きれいな世界がなくては
生きてはいけなくて。

でも
それは決して我儘ではなく
決して弱いわけでもなく
それがぼくのまま
ありのままなのだから。

ちろちろり。
儂い光しか放てなくて。
でも
それがぼくの精一杯。

それがぼくのまま
ありのままの姿なのだから。

ほんとうに
ほんとうに困ったものだね と
苦し紛れに苦笑いしたら
あなたはほんとうにきれいね と
きみはとってもきれいに笑ってくれたんだ。

リボン

あの日 きみがくれたちいさな青い箱。
ずっとむかし きみがくれた贈りもの。

スカイブルーのリボンの色も褪せて
どうしてきみがこれをくれたのかもわからないまま
ようやく 今日になって ぼろぼろのリボンを解いてみた。

贈りものとは
重いものです。
そこになにが込められ
どんな想いで
なにを考え
贈られたのかは往々にしてわからないものだから。

贈りものとは
せつないものです。
込められた想いも
一途さも
贈り手に届くとは限らないものだから。

黄ばんだ白い箱のなかに
そっと包まれて
くるみの実が
ちょこんとぼくを見上げていた。

くるみの実には随分窮屈な思いをさせてしまった。
もちろん きみの思いにも 酷い仕打ちをしてしまった。
いつか きみが言っていた言葉を今でも憶えてる。
『おとなになったら おおきなくるみの木の下のおうちに住みたいね。』

きっと 次の日曜日
真っ白な洗濯物が靡く日曜日
きみは ぼくのもとへとまっすぐ走ってくるだろう。
こんどこそ

離すことなく抱きしめるから
いっしょにくるみの木の下の家で暮らそう。

きみがぼくにくれたリボン。
きみがぼくにくれた “Re-born”。

故事成語の陰に

一寸先は闇 とは
よくぞ言ってくれたもので
わたしの臆病は
そこに隠れて笑ってる。

闇ならば 前に進まなくてもいいよ。
闇ならば 見透かそうとしなくてもいいよ。
だれかが そう言ってくれる気がして。

五里霧中 とは
よくぞ言ってくれたもので
わたしの億劫は
そこに隠れて安堵する。

霧ならば 歩かなくてもいいよ。
霧ならば もうがんばらなくていいよ。
だれかが そう言ってくれる気がして。

赦してほしい。
臆病でも生きているから。
赦してほしい。
億劫でも生きていくから。

だれよりも わたしを赦していないのは
わたし なのだけれども。

白紙のうた

頭のなかで 耳の奥で
反響する声なき声に急かされて
わたしは
ただ 黒いだけの空を見上げている。
声なき声は わたしの頭蓋を内側から叩いて
さあ おまえの時間を止めてやるぞ
と
わたしの時間を 加速させていった。

白紙のうたに埋め尽くされた
頭のなかに浮かんで消えるのは
いままで生きてきた
光のような思い出と
闇のような記憶。
もみの木に飾られる電飾のように
強く瞬いては消える。

これは走馬灯？
死の前に 天に召される前に ひとが見るという。
脳から流れ出し 地に堕ちてゆく
生きていた証を眺めやり
ぼんやりと薄れていく意識のなかで
まだ見たことのない景色に憧憬を抱く。

ぼたり ぼたり
ひとしづく また ひとしづく と
零れ落ちてゆく命のかけらに 洗い出された
白紙のうたの正体は 紛れもなく わたしそのもの。

生まれたときから死ぬことは決まっているのに。
どうしてみんな 平気で生きているんだろう。
白紙のうたのカウントダウンは
一瞬たりとも途切れずにつづいているのに。

永遠に咲き誇る花なんて
世界のどこにもないと 知りながら。

目の前で 光が弾けた。
わたしが目にする最期の光。
ほら やっぱり 生まれてきたときから
死ぬことは決まっていたんだ。
白紙のうたの調べが すべてを埋め尽くしていく。

こんな顔だったかい

記憶のほころびができてしまって
うまく昔を思い出せないから
本棚から引っ張り出した
アルバムを開く。

写真を何枚か見たら
思い出せるだろうと
ぱらぱらとページをめくるけれど
そこに写っているのは 顔のない人間ばかり。
Vサインをしながら寄り添う のっぺらぼうたち。

言葉にならない悲鳴とともに
アルバムを閉じた。

どうして『記憶』になった途端 みんな顔をなくしてしまうの？
わたしの『過去』はどこに どんなかたちで 存在しているの？

家族を愛していたような気がする。
けれど あのひとたち どんな顔をしていたっけ？

だれか
早くわたしの記憶を返してください。
わたしに向けられた笑顔を返してください。

そして
あの怪談のせりふで
のっぺらぼうをつるりと拭って振り返り
わたしの愛した笑顔を返してください。

「おまえの愛した顔は こんな顔だったかい？」

カスミソウ

交錯するサーチライトのしたで
きみを待っている。
胸に きみに届けたいことばと
ちいさな花束を抱えて。

『そのことばを届けると 後戻りはできないよ。』
警鐘が そう告げている。
サーチライトは そんなぼくを照らし出そうと
躍起になって 蠢いている。

カスミソウは
不安の渦に飲まれて
溺れそうになり
強く抱きしめれば 抱きしめるほど
一輪 また一輪 枯れていってしまう。

それでも
交錯するサーチライトのしたで
きみを待っている。

花束は
祈りながら 願いながら
海からの風に激しく揺れている。

カスミソウでごめんね。
こんな花じゃ 目印にならないな。
薔薇を たくさんの薔薇を 両腕に抱ければよかった。
それでなければ せめて カーネーションを。
薔薇に似ている あの花を。

目の前を通り過ぎるひとに
疲れ果てて いまにも息絶えそうなひとに
カスミソウの欠片をひとつずつ手渡していく。
あのとき きみが 薔薇の花弁をそっとぼくに握らせてくれたように。
光をなくした瞳のひとが 微かに笑って
『ありがとう。』

と呟いて 歩き去っていく。

想いは

サーチライトに焼き消されそうだ。

潮風が 逃げ回る足をからかうように 通り過ぎていく。

それでも

錯綜するサーチライトのしたで

きみを待っている。

真っ白な花束と

『ありがとう。』を抱えて。

プール

自転車が小学校のプールのそばを通り過ぎる。
色とりどりのタオル 弾ける笑い声 水の音。
わたしにもこんな時代があったはずだと
プールの香りを吸い込んだ。

水底に沈みこんだとき
水面に乱反射する日の光。
耳の中に入り込む
生温い水の温度。
ぺたぺたと足の裏に貼りつく
黄色い砂の感触。

すべてのしあわせを閉じ込めたような
懐かしくて ほろ苦い プール。
ほろ苦いからこそ
もう戻れない
あの夏の日々。

魚捕りの網を 父が繕ってくれたこと。
うまく泳げないわたしを 母が近所のプールに連れて行ってくれたこと。
やっと 補助輪が取れた自転車で あちこちに冒険に出かけては叱られたこと。

きっと そんな風になるはずだとわかっていたけれど
いつの間にかわたしは 中途半端におとなになって
夏の暑さを 煩わしいとしか感じられない生きものになっていた。

こどものころの 一瞬一瞬を
硝子に閉じ込めて
こころの風が吹きぬげるところに飾ろう。
真っ白なこころが死ぬ前に。
どこまでも透明な記憶が消える前に。

風鈴のように きっと いい音がするだろう。
わたしは 自転車をぐっと踏み込んで 小学校の校舎を離れた。
塩素の香りが どこまでも そっとわたしを包んでいる。

光と水でできるもの

熱を出した 早引けの午後。
母の背中に「ごめんなさい。」を繰り返す。
グラウンドに落ちる 冬の影法師が
ふたりぶんなのに ひとりぶんに見えた幻。
保健室の先生からもらった
レモン味ののど飴が からん と口のなかで笑った。

病院でもらった粉薬を
我慢して飲んだ背中に添えられた手が
「いい子、いい子」をしていてくれたこと。
いまでも憶えている。

体温計を覗いて
いつもは聞いてくれない我が儘も抱きしめてくれた。
「なんでも好きなものを作ってあげるから。」
と言われて でも食べたいものなんかなくて
きのうそれを聞いてほしかったなあ… とぼんやり想った。
それも いまでも憶えている。

おかあさん。
わたしにも あんなふうに だれかを大事にできる日はくるかな。
わたしにも こんなにも だれかを慈しむことができる日はあるかな。

あなたに
注がれた愛情が
わたしのすべてを成しています。
わたしは乾いた植物だと想っていたけれど
じつは 瑞々しく光合成を繰り返していたのですね。

おかあさん。
あなたが もしも 光をなくしたら
今度はわたしが あなたの光になりましょう。
あなたが もしも 水をなくしたら
今度はわたしが あなたの水になりましょう。

あなたが もしも その笑顔をなくしたら
今度はわたしが あなたの笑顔の理由になりましょう。

かなしいことがあったんだ。

かなしいことがあったんだ。
こころが悲鳴をあげている。
それでも笑ってみせたんだ。
泣くのはみっともないでしょう？

かなしいことがあったんだ。
こころのなかに積もり積もって
上手に笑えなくなっちゃった。
それでもぼくは笑ってみせる。
ぼくはちゃんと笑えていますか？

「かなしいことが、あったんだ。」
ぼつんとこぼしたそのことば
やさしい手のひら掬ってくれた。
『泣きたいのならここで泣いて？』

かなしいことがあったんだ。
ぼくは涙をぼろぼろこぼす。
受け止めてくれるきみの
やさしい手。
縫っていいかと握りしめた。

かなしいことがあったんだ。
止まってくれないぼくの涙は
いまはちがう香りの涙。
うれしくて涙が溢れてる。

かなしいことがあったんだ。
きみの存在がうれしいんだ。
かなしいことがおしえてくれた
これ以上ない　うれしいこと。

あなたの名前を呼びながら

あなたのことばをさがしている。

渴ききった喉で それでも

あなたの名前を呼びながら。

この闇のなかで あなたに逢いたくて

あなたのことばをさがしている。

「どんなきみでも ぼくにとっては大事なきみだから。」

「ダメになりそうなき ぼくの名を呼んで。」

あなたのことをさがしている。

乾涸びた声で 必死に

あなたの名前を呼びながら。

この闇の底で あなたに笑ってほしくて

あなたのことをさがしている。

もういちど もしも あなたに逢えたなら

この春風に微笑める気がして。

もういちど もしも あなたに逢えたなら

このかなしみに耐えられる気がして。

あなたに出逢い

わたしは強くなり

あなたに出逢い

わたしは弱くなりました。

あなたがいれば どんなことがあっても笑えて

あなたがいなければ こんなことで泣いています。

天国行きのプラットホームはどこですか。

天国行きのバスは何時に出ますか。

天国行きのフライトは何番ゲート出発ですか。

膝を抱えて 部屋の隅で

あなたの名前を呼び続けるわたしを

どうか

もういちど

あの笑顔で 救ってください。

雑踏

雑踏は 嫌い。
すべてを飲み込んでしまうから。
ぬくもりも
つめたさも
すべてを飲み込んで
なにもなかったような顔で笑うから。

すれ違いざま
急に後ろで笑い声が弾けた。
わたしのことを笑っているようで
怖くて
足が竦んだ。
あわてて珈琲店に逃げ込んだ。

雑踏は 嫌い。
ひとがひとの顔をなくしてしまうから。
見知らぬ人同士が
まるで
疲れたモノとモノのように
行き交うスクランブル交差点に
コーヒー色のため息をついた。

この珈琲店を後にしたら
雑踏にまぎれる無関心を
どうぞわたしに向けないでください。

どうか やさしい眼差しを
わたしにください。
もしくは
つめたい一言でも。

道化師の涙

ちいさな ちいさな
とあるサーカスに
ひとりの道化師がいました。

彼は
いつも
口元を三日月形にくりぬかれ
頬に涙の印のある仮面をつけて
ずっと 微笑みを浮かべていました。

道化師には 大切な相棒がいました。
茶色のふわふわした毛の柔らかい
ちいさな子猫です。

道化師と子猫はいつも一緒です。
春を夏を秋を冬を 一緒に過ごしました。

けれども ある寒い日のこと。
道化師の愛した子猫は
サーカスの公演中
火の輪くぐりに失敗し
ちいさな命を落としてしまいました。

道化師は泣きました。
舞台のうえではじめて声をあげて。
熱い涙を零して。
もう二度と還ってこない
かわいい相棒を想って。
道化師は 舞台のうえで
亡骸になった子猫を抱いて泣きました。

そのときです。

いつも道化師の顔を隠していた

泣き笑いのような顔の仮面が
舞台の床に落ちました。
高く 澄んだ音を立てて。

道化師は
仮面を手に舞台を降りると
三日月形の笑顔を 遠くに投げ捨てました。

いまでは
道化師は仮面をつけることなく
サーカスの舞台に立っています。
道化師が
子猫のために供えた花が
春の風にやわらかく揺れています。

うつくしいひと

そのひとは
崖のうえに
絶望を身に纏って立っていた。
なにものをも
寄せ付けぬほどに
つめたいかなしみを纏って立っていた。

ぼくは
崖につづく道
釣竿を片手にそのひとを見つけた。
ああ 永遠に触れられないひとがまたここにいた
そう 想った。

触れられぬかなしみがあるのです。
なにものをも寄せ付けぬかなしみ。
そんな想いは気づかぬふりをして
どんなところのなかにもあるのです。

時として
不意に 脆弱で鋭敏な部分に
手が触れて
呼吸が止まることはあるけれど。

永遠に触れられないひとは
道端のそこここにおいて
ぼくを見上げて
なぜか怯えた瞳をする。
その瞳の色で
ぼくはそのひとの肩に触れられぬことを悟る。

黒い服が潮風にたなびき
ああ まるで喪服のようだと想った。
これからの彼女への喪服のようだと想った。

ふと

彼女がこちらを向いた。

やはり

どこか怯えた色の瞳。

ぼくはちいさく会釈して

回れ右して 歩を進めた。

そして

振り返ると

彼女の姿はもうなかった。

かなしくて せつなくなるほど

うつくしいひと。

そんなひとだったと

ぼくのこころのだれしもを寄せ付けぬ部分が告げた。

彼女のことは もうだれも知らない。

嵐のドア

こころのドアを開けたまま
だれかが来るのを待っている。
だれが来てくれるのかはわからない。
それでも だれかしらは来てくれるだろう。

こころのドアは開けたまま
閉じ方を忘れてしまった。
嵐がやってくると ラジオが告げているのに
こころの閉じ方がわからない。

こころのドアを閉じると
だれかの笑顔に二度と会えない気がして。
だれかのやさしさに二度と触れられぬ気がして。
だからドアを開けていたのに。

嵐が来た。
ぼくの日記もオルゴールも
要らないものだと棄てながら。
この部屋に来てから はじめて泣いた。

あの日記は
ぼくの毎日を知る唯一の友達。
あのオルゴールは
ぼくの毎日を彩る唯一の親友。

足音が聞こえた。
びっくりして顔をあげると
ぼくと同じ年くらいの男の子が立っていた。
「このドア はじめて開いたね。」

開けていると想っていたのは
ぼくの頭の方だけで
実際 心は閉ざされたままだったんだ。
嵐が すべてを奪って ドアも壊して 去っていったんだ。

「よかったら 一緒に遊ぼうよ。」

生まれてはじめてかけられた言葉。

うれしくて頷いたら

あのオルゴールのメロディが聴こえた。

あたたかいもの

開けてはいけない
あなたの心の闇を
知りたがって。
あなたのことで
知らないことがあるのが怖くて。

パンドラの箱を
こじ開けようとした。

あなたの
『いつか』を
信じようともせずに。
あなたの
『待って』に
耳を傾けようともせずに。

あなたの痛みに
あなたの心の悲鳴に
気づきもしない鈍感さで。

でも
それは決して好奇心ではなく
ましてや あなたを傷つけるためでもなく
ただただ あたたかなはずの感情の裏返しで。

『そのときまで待って』とあなたは言った。
『いますぐによ』とわたしは言った。
痛みを分かち合うことこそが
あたたかいものの証だと
そう思ったから。

あたたかいもの。
名前のつかないかけがえのないもの。

わたしが焦れば焦るほど
ぬくもりは

箱の鍵を探る指の隙間から滑り落ちて。

そして

とうとう

怯えたあなたが背をむけた。

あたたかいものは

急速に凍りついた。

…いま わたしの手のひらには なにもありません。

ただ パンドラの箱を開けようとした

罪の証のほかには

なにも。

ただ わかってほしかった。

あなたの 心に触れたかったものが

名を成さぬ あたたかいものだったことを。

こころのひかり

ちいさなしあわせで
それだけで
生きていけると想っていたのに
いつの間にか
おおきなしあわせを
両腕に抱えきれないほどのしあわせを
さがしていたぼくに ふと気がついた。

きみを失ってから
ちいさなしあわせに気づけなくなってしまったよ。
もういちど きみが戻ってくること
もういちど きみが笑ってくれること
もういちど そのあたたかい手で安心させてくれること。
そればかりを考えて
そればかりがしあわせだと
さびしいところで考えていた。

会うたびに どんなに遠くからでも
ぼくを見つけてくれたね。
会うたびに どんなにくだらないうちでも
ぼくだけに笑ってくれたね。
会うたびに 手を差し出して
ぼくだけの手のひらを差し出して 安心させてくれた。

出逢って はぐれたきみ。
もう二度と 出逢うことはないのに。
光って 消えた笑顔。
もう二度と 出逢うことはないのに。
むすんで はなれた手。
もう二度と 出逢うことはないのに。

だけど
思い出のなかで
記憶のなかで
きっと こころの光は変わらない。
どんな暗闇のなかにも

どんな失望のなかにも
たとえ絶望してしまっても
きみがくれた ころの光は変わらない。

ちいさなしあわせをさがして歩くよ。
きみがおしえてくれたように。
だから
もう二度と逢えなくても
きみのしあわせを願わせて。
もう二度と逢えなくても
ずっとずっと ぼくの光のままでいて。

人生はまだつづく。
だいじょうぶ。
きみも ぼくも
しあわせになれるよ。
しあわせになろうね。

ひつじがはこんだ夢のうた

<http://p.booklog.jp/book/53532>

著者：だいず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/miyayuki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53532>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53532>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ